

## 第2回飛騨天文台子ども自然体験教室に参加して

清水湧三（宇治市教育委員会・理科支援員）

きっかけは NPO 花山星空ネットワークからの案内に国立天文台乗鞍コロナ観測所見学の記述を見つけた。この施設の廃止が予定されていることを聞いていたので、この機会を逃すともう見られない、そういう思いが募りだし、思い切って黒河先生にメールを出し、付随行動することを了解願った次第である。昔のことであるが乗鞍岳登山のおり、銀色に光るドームを見つけたことがあった。「コロナ観測」という言葉を思い出し、「そうかあれが観測所か、ちょっと寄り道をしようよ」でも、自分だけが登山パーティを離れることもできず、横目で見過ごした心残りがあったのである。今回は通常的一般コースで窓越しに見られる 25cm コロナグラフ施設ではなく、観測研究現場を見学させてもう事になった。さらに幸運にも晴天にもかかわらず、観測には不向きという天候に急変したことという事で、ドームの中まで案内していただき、通常は見学できない 10cm コロナグラフの観測機器をつぶさに見ることができた。海拔 3000m 弱の高山における太陽観測も自然相手の難しさの一面を見たようでもある。厳冬期での観測体制や、生活も偲ばれる居室、観測機器の補修修理もされるだろう工作室など設備はかなり時代を経た感じだが 限られた環境での創意工夫で観測されている状況がうかがえ興味深かった。

2つ目の理由は、飛騨天文台の見学は放送大学の面接授業としてあるのだが、応募人員が多く狭き門で、なかなか希望どおり参加できない事情もあった。太陽望遠鏡、SMART などの観測施設の見学ももちろん期待していたが、静かな高山域にある観測施設内で、昼は鳥のさえずりを聞き、夕日や朝日と遠くの北アルプスの山並みを眺め、夜は寝袋にもぐりながら、満天の星空を眺めるこんなことを夢見てきた。でも現実には、耐震構造化に向けてビル解体工事の真っ最中で、周囲が静かな分余計に街中以上の騒音が目立つ。ところがこの騒音がかえって良かったと言う皮肉な結果となった。別行動で先に到着したので、時間に余裕もあり、観測所近くの三角点あるピーク大雨見山（1336m）を目指した。研究員の言葉どおり、すぐに目的地へ着いた。普段は人が立ち入らない領域らしく草むらをガサガサと動物の気配、静かに目を凝らしてみると目が光った、どうもタヌキのようだ。

自然がいっぱいの雰囲気、気を良くして、目印の赤いリボンを辿ると巨木の樹林帯に出くわした。喜んだのも束の間、帰り道を見失ってどうも獣道らしい。耳を澄ますと、例の建設機械のダダ音聞こえるのではないかと。音を頼りにもと来た道を見つけ事なきを得た次第。

3つ目の参加した動機に、「子供たちとどのように接するか」この命題が急遽身近になったからである。「理科支援員」として、小学校での理科教育を支援すると云う仕事なのだが、今まで初等教育などとはまったくの門外漢である。今回のNPOの乗鞍岳高山植物観察などで、その対処の仕方を参考にできるのではないかと。参加した小学3年生から中学2年生の幅広い年齢層の子供たち相手に、教育のプロでNPO会員でもある先生方の子供への接し方をつぶさに学ぶことができ、思い切って参加した甲斐があったと思っている。また子供たちの思いがけない観察力、表現力に新鮮な思いを感じた。このNPO花山星空ネットワーク会員であったからこそ、このような体験機会を得られたことを感謝したい。



飛騨天文台敷地内の風景



乗鞍岳コロナ観測所から穂高  
槍ヶ岳を望む